



日本百將傳一夕話

四

~ 13
3566
4



門 13
號 3566
卷 4



小久保ひさゆき
將傳一夕話卷之四

東都

松亭金水謹撰

○	○	○	○	○	
源 <small>みなもと</small>	源 <small>みなもと</small>	源 <small>みなもと</small>	源 <small>みなもと</small>	平 <small>たいら</small>	目
義 <small>よしか</small>	頼 <small>たのむ</small>	頼 <small>たのむ</small>	頼 <small>たのむ</small>	惟 <small>ただ</small>	録
家 <small>いへ</small>	義 <small>よしか</small>	信 <small>のぶ</small>	光 <small>あき</small>	茂 <small>しげ</small>	

源傳一夕話卷之四

詳三堂藏板

早稲田大學圖書館
照 34.6.3 契
藏 書

○清原武則

以上六將目錄終

公孫金水齋



ヨシモ 清陸大掾國香

良望

シゲモリ 從五位上

繁盛

鎮守府將軍

維茂 從五位上

鎮守府將軍

繁茂

繁茂 鎮守府將軍 從五位上 鎮守府將軍 從五位上 繁茂 鎮守府將軍 從五位上

平惟茂

或作 人皇六十六代村帝應和三年卒 于維 今嘉永六年延八百九十二年成

平惟茂者号餘五將軍曾在奥州

為藤原諸任被攻殆死幸得免而

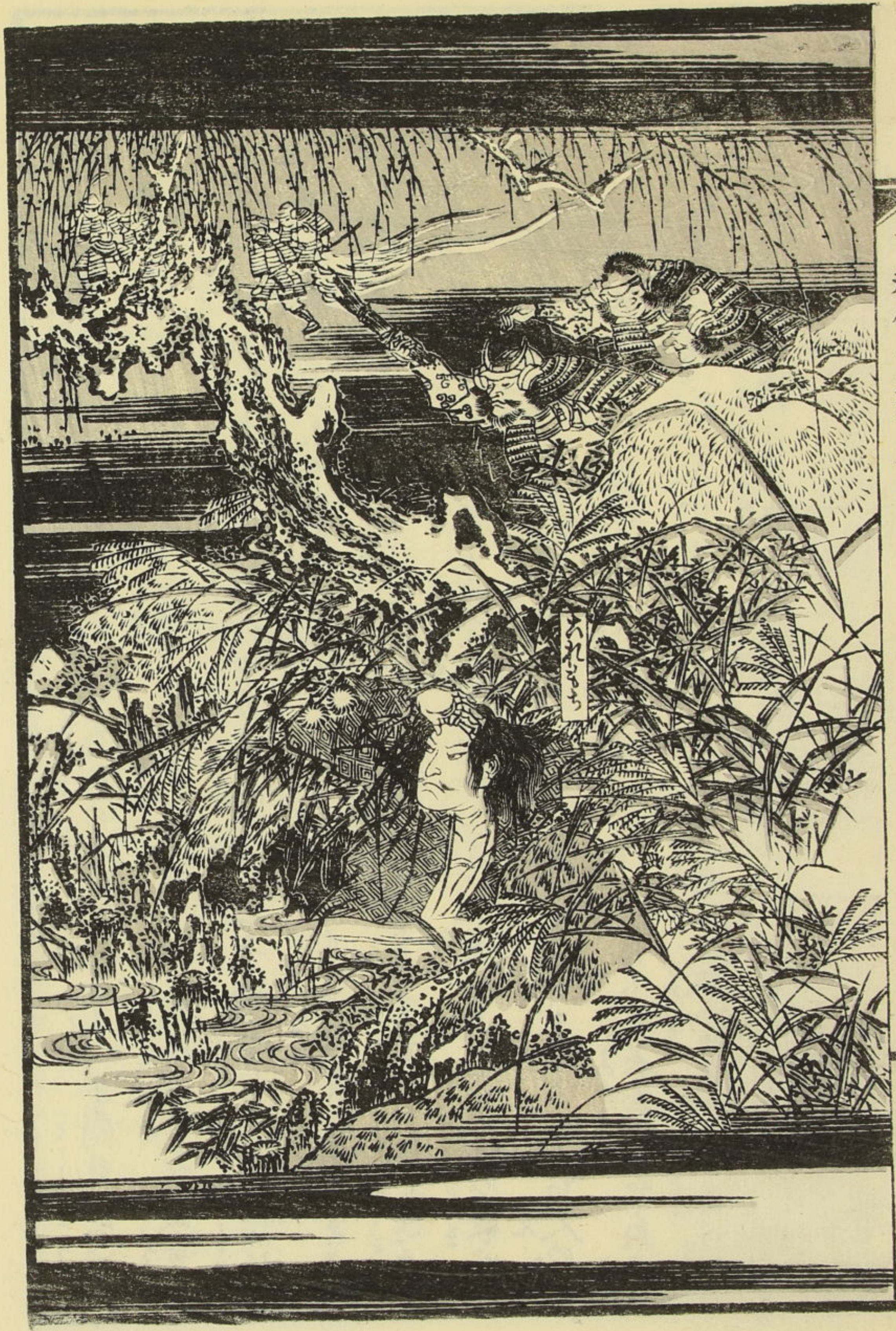
遂殺諸任其威振東北世傳惟茂

入信州戸隠山斬妖鬼云

これら 繁茂の弟繁盛の子。伯父貞盛養ひて。子と成。弟十五。小治政。と。りて。余五と称ひ。性昔の嫡。天邪と。次三郎。比次。弟小治。遂て。十一。余五と成。

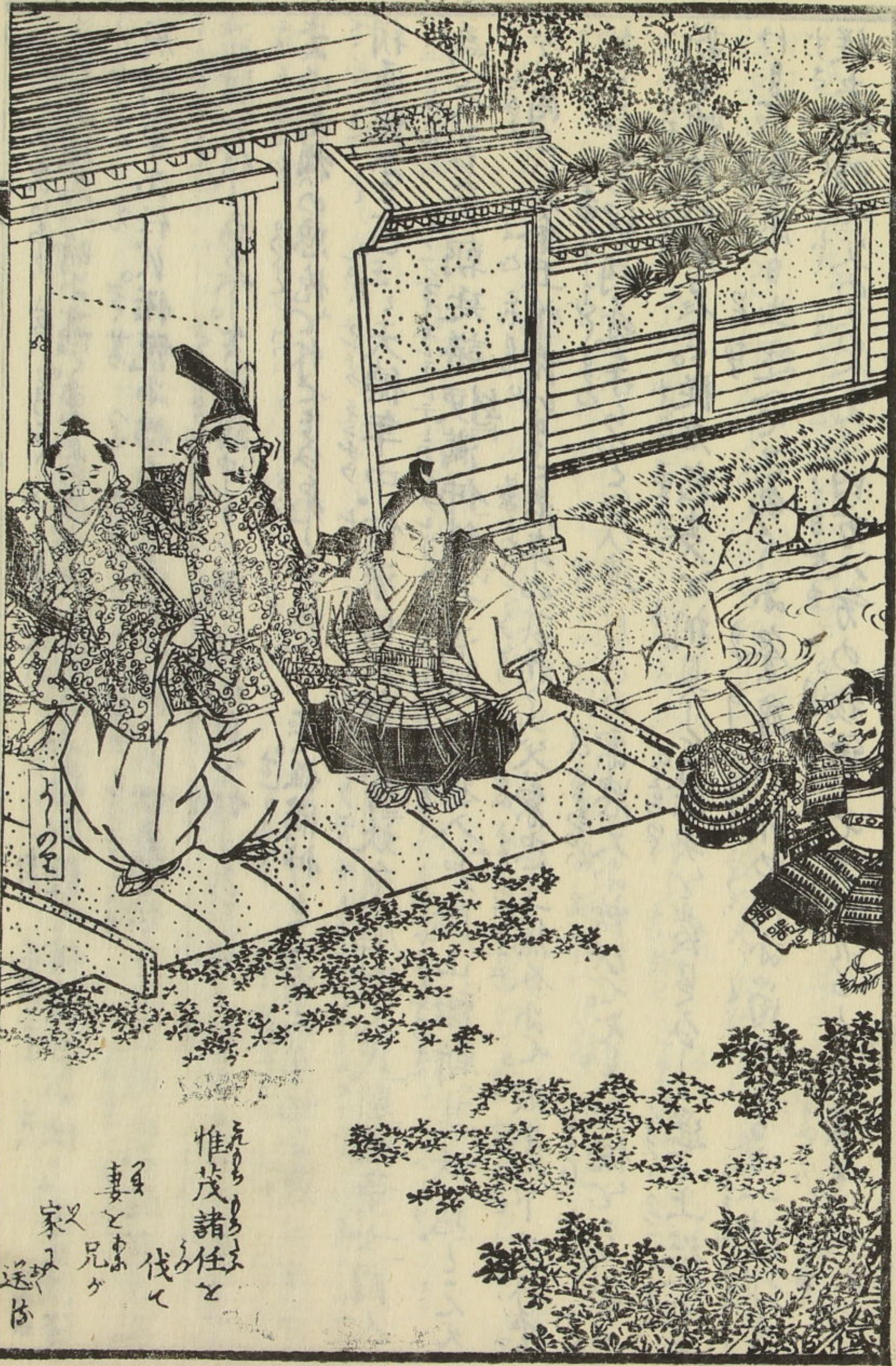


池の中
推茂
命全
入



界を黒煙天と衝く。さふ於て館の男女泣叫ぶ声耳と母貞を逃呻吟々煙の煙
 び猛火の下に燔死するもの約八十餘人あり。澤膜結任の隊分と做し。敏の四方
 と田の火と避へ出る者男女といへば所殺一家と焉小獨り。玄祖の火
 も燃せしむ。その燒迹と見巡る小雅と六老より様をみる。死骸の岳と有りける
 ふぞ。おの中に余五のあり。嗔心地着しと勇と飲び凱を揚げて引退。三吾妻の兄
 ありらる。従五位下好則といふる。能登中橋惟通がふいて文武小賢くふ。老と
 守りて仁老深く。いよた武士ありけし。世人大君とぞ移へらる。於て法任のみの
 大君が門におゐりて。此ととる信らと。大君を立出さる。我ひの勝利と祝し。渠と
 さ英推と。家小發る。討つに甚難しとする。然るを輒く滅し。あま小徹抄働
 り。但し余五が首と撃て取付小結子あり。然るに首と獲る時大物あり。たふけし。率にふら
 ら何ふといふ。澤股巻へて首と。親ら獲る。さとも。館不在りのといふ。約猶も道

得し。余五の道とん。いといと誇る。小春ふれ。大君頭と傾け。余五の
 の老が阿容と。煙の裏小や斃る。必しあり。いといと諸任猶曉ら。開
 臆念ふ。過るる。争する。とある。と更小懸念の神あり。大君元未思慮。海口
 ま。已の一向女堵せ。足下們小酒飯と。餐應。この思へとも。此処小是と。注させ
 て。程近。便悪し。途より贈り。来らせん。小頼。とと。遠り。又と。遠し。と。澤
 股の依り。賢と。頼る。と。冷笑ひつ。互出。見たり。半里を。り。遠北の方。いふ。と。て
 南小川の流。まあり。廣さ。是。生の暖る。ふ。軍勢。と。小懸。せ。右。左。す。ち
 大君より。大橋。十。純。能。五。六。桶。を。他。陸。鳥。經。新。など。と。ま。く。小。洞。理。と。腕。里。小。け。れ
 ば。うち。軟。び。膏。より。出。て。腹。の。耗。ら。う。懐。き。乾。け。一。整。小。酒。と。飲。み。能。と。食。ひ。お。貝。も
 ころ。脱。捨。て。悠。々。と。する。を。回。小。株。と。さ。も。橋。を。蹴。せ。鞍。と。卸。し。て。株。を。肩。ひ。酒。あり
 碎。り。日。の。暖。り。殊。小。方。き。上。る。と。各。糧。と。枕。り。て。熟。睡。し。さ。も。多。う。り。粵。小。惟



百将傳 八景卷之四

群玉堂藏板

惟茂諸任と
 妻とあふ
 兄が
 家
 送り



百将傳 八景卷之四

群玉堂藏板

密び出て懐小隠し持する刀と杖と熟睡する大郎が喉を切つて紛れ失ぬ下
 僕等も去途の勞も不居眠りて是と云ふ夜明け祝まばその密小孫と狼狽に
 くと若る惟あてた小孫と是と探る小孫小孫所為ある人の老あれは小
 父のあひおたての事と若く小孫と在下小孫の他国へ来りて幼の如き事あり
 此れおていふ大郎怒て言けし兼忠は叱りて弗おんえは渠ある事と若くは
 ことごとく賜りて殺えんとて死す近曾理を渠が父の大郎が討まふ因て仇と
 報す親の敵と討て天道も許さぬあるふた様言まて思ひ若人あつて吾を殺
 すとも汝の故と討ぬる事。言得ぬ事との分の事と若く切て答へしは性成かす
 討あがる久小長居の益あり国許へは帰らんと早を飯あるせしとまより后小倉
 後の孝心深きと愛らまていふ事若くあり乃が後ある病つきて失くさる間なり
 護るの多うと單身みんか念と遂に小実小天道の佐と諸人は是と感し乃

系四六孫王より
 惟前見えり
 頼光 攝津守
 右馬頭

源 頼 光

人皇六八代 後一條院治安元年卒
 今嘉永六丑述八百三十三年成

頼国 筑後守
 頼家 出羽守
 頼基 出羽守
 頼昭 永寿阿蘇守

源頼光者満仲長子也勇名籍甚
 為鎮守府將軍伊吹之山凶賊伏
 誅市原野投童授首

頼政 兵庫頭
 国直 土佐守
 明國 下野守
 仲政 兵庫頭

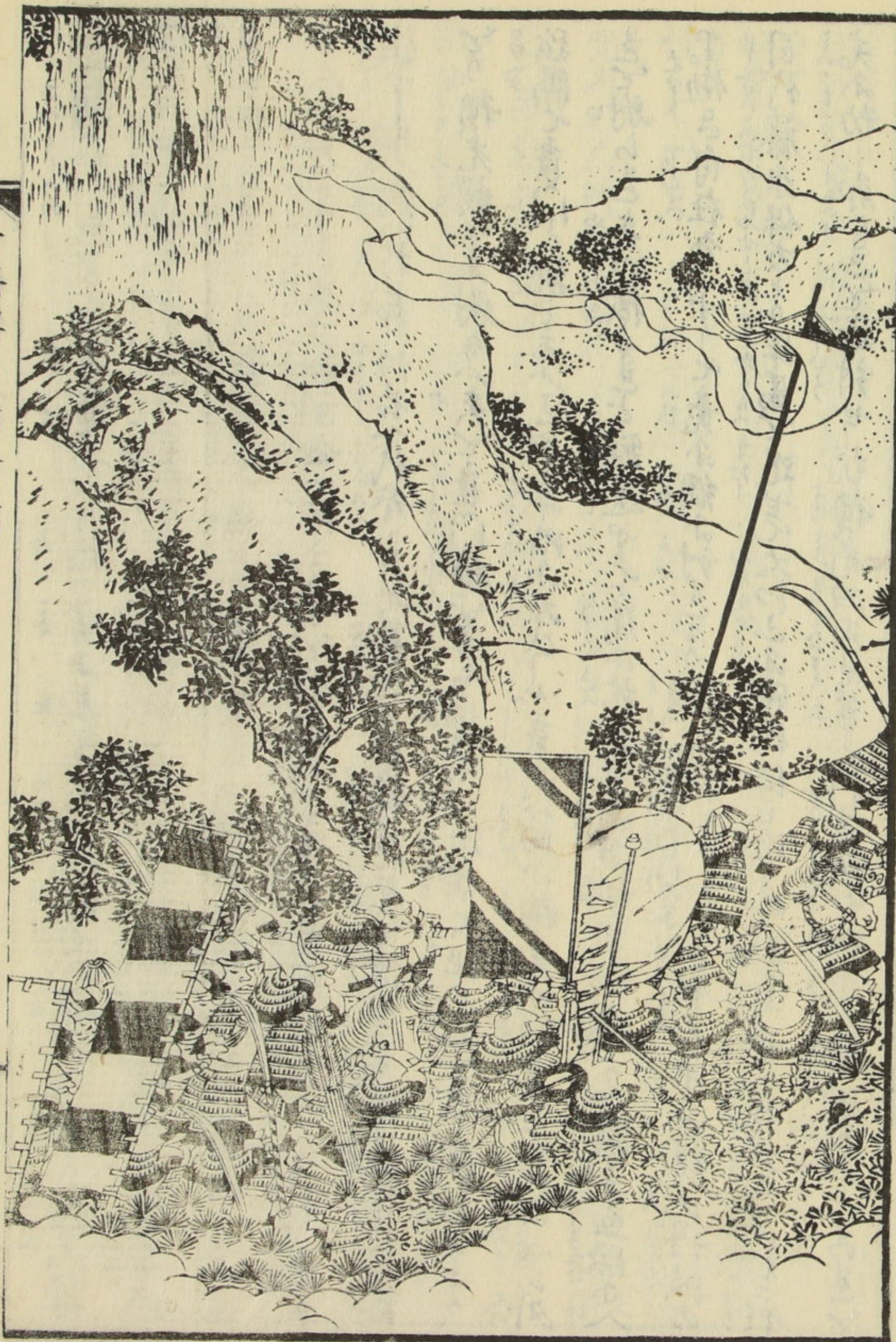
頼光初長の子は、少時、人小膽、其後、よく智新あり。一、世叙任の次、
 説あり、故に小載走らむ、圓融華山一條三條、後一條の五朝、小孫、
 伊豫美濃守と歴て、内務頭と兼、左馬権頭、民部大輔、小遷、
 小孫、鎮守、將軍、小拜、治安元年七月廿四日卒、六十八歳

百將傳一列傳卷之四

源頼光の話

頼光朝臣の馬小達。古今云及の名將ありて人々を斬りての朝臣の
 一世の勲功多し。中大江の元賊討伐侍吹山の賊賊と退治し市原の鬼童
 と闘ひて死す。頼光朝臣の先陣日稱せしむる。前文小詳ありて是事漢の
 平記におよび余が著し。頼光朝臣勲功甚多し。今もいふ。かまはるる
 是といふ。いふ。頼光朝臣の勲功甚多し。今もいふ。かまはるる
 自んあつて。頼光朝臣の勲功甚多し。今もいふ。かまはるる
 序とせしむる。頼光朝臣の勲功甚多し。今もいふ。かまはるる
 源朝臣俊の女あり。小名と文珠丸と号し。康保二年十一月某日。元服あり。源頼光
 と号らる。天禄三年上総介に任ぜしむる。前文小詳ありて是事漢の
 ある。天延二年十月廿二日。藤原の女ありて。唯氷荒太神と号す。月日年八月任限あり

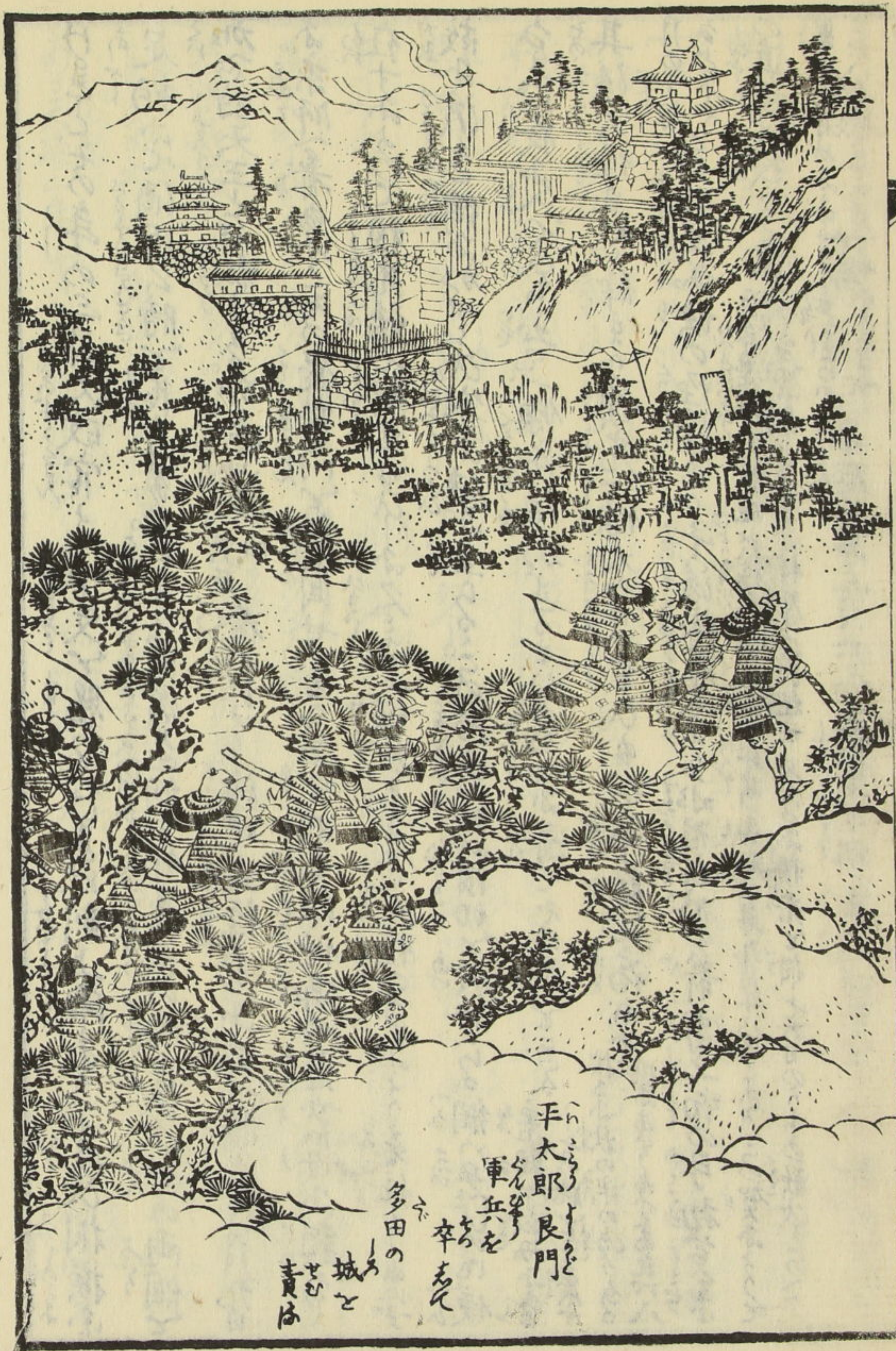
けきど。その年の三月大政官より。下文と賜りけしむ。則上洛あり。小及次相模
 足柄小酒田公時と号し。是より。河原を網下郡。季武の両氏あり。件の両個と
 加。四天王とぞ私し。かくて。天延四年春の比。源中次。怪あり。小依て。頼光は。月九日
 小京師へ着あり。その。信長門と。誓圓せしむ。小中納言。維仲卿の息女。世小類あり
 在す。小よつて。頼光と。契あり。小之。小。飯家。あり。小。文怪の。多。小。より。音。信。あり。小。あり。子
 故。小。液。を。網。小。か。し。小。ひ。容。小。使。小。立。ら。る。小。の。時。又。叙。叙。切。と。け。け。ら。網。小。ひ。忍。び。の。使
 る。小。夜。小。入。り。小。出。り。小。一。條。後。橋。か。ま。る。小。鬼。女。小。遭。て。小。腕。と。さ。る。鬼。網。小。叔。母。小。立
 其。後。文。怪。日。や。靜。り。頼。光。一。條。大。官。へ。登。り。小。瘡。病。と。病。あり。按。小。秋。の。半。の。冷。り。る。小
 月の下旬。この時土師の怪異あり。後。椒。華。女。より。小。破。其。破。の。箭。雷。上。初。の。弓。初。言。系
 の。直。垂。と。授。り。る。小。年。歴。詳。あり。他。他。頼。光。後。に。直。の。年。号。天。延。二。年。九。月。十。八。日。あり。小。賀。小。より。て
 果して。六月。小。市。原。の。事。あり。小。の。事。あり。天。延。三。年。三。月。廿。二。日。約。軍。太。郎。良。門。四。百。五。十。人。の。野。伏。と。か
 と。記。し。天。延。三。年。九。月。下。旬。の。事。あり。小。の。事。あり。天。延。三。年。三。月。廿。二。日。約。軍。太。郎。良。門。四。百。五。十。人。の。野。伏。と。か



百子傳 卷之四

〇七

洋正堂藏板



百子傳 卷之四

君玉堂藏板

平太郎良門
軍兵を
幸ふ
多田の
城と
責は

前前後後不^レ断^レて首^レ支^レ仲^レも寸^レ不^レ切^レらる^レ此^レ年^レ春^レの比^レ濱^レがかり^レが法^レ大^レ物^レの武
 功^レ不^レ同^レて一旦^レ静^レ謐^レあ^レ及^レぶと父^レども首^レ領^レの藩^レ不^レ隠^レと居^レて近^レに侍^レ吹^レの心^レ中^レ不^レ七^レ
 在^レ所^レと幼^レ習^レひ^レら^レ不^レ放^レて這^レ回^レも頼^レ光^レ朝^レ臣^レと擇^レま^レして討^レ争^レの派^レ命^レ下^レす
 う^レ不^レ子^レ負^レ頼^レと楯^レの廻^レら^レ網^レ公^レ時^レと相^レ副^レら^レは^レ守^レの季^レ武^レ貞^レ道^レ以^レ下^レの軍
 兵^レと引^レ率^レ一^レ兩^レ併^レ合^レて二^レ万^レ作^レ防^レ侍^レ吹^レのあ^レ後^レと^レち^レ圍^レ同^レ八^レ月^レ七^レ日^レの早^レ旦^レより
 日^レ々^レ合^レ戦^レ止^レめ^レる^レ派^レを^レ網^レ多^レ計^レと^レり^レ楯^レの同^レと^レ攀^レ難^レ多^レ城^レ中^レ不^レ入^レけ
 ま^レ賊^レ等^レの防^レぐ^レさ^レ術^レ計^レる^レ西^レの祖^レの岸^レより數^レ千^レ丈^レの谷^レ底^レへ人^レ類^レと突^レて落^レ勢^レつ
 頼^レ不^レ落^レ城^レ不^レ及^レび^レる^レ元^レ未^レら^レ侍^レ吹^レの首^レ領^レと酒^レ頼^レ童^レふ^レと^レり^レひ^レりて頼^レ其^レの渠^レ向^レ不^レ滅
 び^レと^レい^レふ^レ人^レら^レの処^レへ再^レび^レ出^レら^レんと^レ笑^レ人^レ毎^レ不^レ怪^レと^レ思^レひ^レぬ^レ老^レの^レ故^レ不^レ頼^レ光^レの首^レ領
 と^レ思^レひ^レて賊^レ徒^レと^レ多^レく^レ捕^レへ^レど^レ酒^レ頼^レあ^レんと^レ視^レあ^レる^レ折^レ多^レ破^レ處^レ不^レ十^レ七^レ八^レより^レ二^レ十^レ四
 五^レ計^レの妓^レ女^レ二^レ十^レ人^レを^レ居^レら^レし^レと^レ押^レ寄^レて^レ故^レと^レ向^レふ^レ是^レ等^レの賊^レの妻^レ子^レ不^レあ^レび^レと^レ進^レむ

う^レり^レ奪^レは^レして^レら^レ不^レ未^レ理^レ飽^レぬ^レ株^レ脊^レの中^レと^レ裂^レき^レ思^レを^レ你^レと^レ頼^レ不^レ離^レと^レ思^レひ^レゆ^レり^レぬ^レ杖^レ賊
 の妻^レと^レ名^レと^レつ^レけ^レら^レして^レ仇^レあ^レる^レ後^レの^レ撰^レ陳^レの^レ怨^レ襟^レ哀^レと^レ比^レあ^レく^レ死^レど^レり^レて^レ多^レ月^レ日
 と^レ存^レ命^レつ^レら^レう^レと^レ云^レら^レば^レ依^レり^レ世^レの^レい^レひ^レ難^レに^レ酒^レ頼^レと^レの^レ虚^レ言^レと^レ頼^レて^レは^レ捕^レ百^レ卒^レ隊
 人^レと^レ是^レ不^レ牽^レと^レ凱^レ陳^レあり^レま^レと^レ罪^レ科^レ不^レ行^レひ^レあ^レる^レか^レの^レ女^レ子^レと^レの^レ其^レ不^レ所^レへ^レ寄^レあ^レり^レ返^レさ^レす
 乃^レと^レ死^レる^レ人^レの^レ蘇^レ生^レて^レ再^レび^レ来^レる^レ思^レひ^レと^レあ^レり^レ流^レ不^レ便^レひ^レり^レ實^レ不^レ源^レ家^レの^レ大^レ物^レの^レ命^レ
 親^レと^レて^レ歎^レび^レる^レか^レと^レ後^レ長^レ保^レ元^レ年^レ頼^レ光^レ東^レ官^レ大^レ進^レあり^レあ^レる^レ寛^レ弘^レ年^レ中
 陸^レ奥^レ守^レ護^レ守^レ府^レの^レ軍^レで^レ兼^レあ^レる^レ一^レ仕^レを^レあ^レり^レ帰^レ洛^レあり^レ按^レ津^レ守^レあり^レり^レ多^レ回
 の^レ難^レ不^レ在^レら^レう^レと^レ支^レ盛^レ者^レ必^レ滅^レの^レ標^レ土^レの^レあ^レる^レ老^レ少^レ不^レ定^レの^レ人^レ命^レと^レの^レ謙^レ也^レ思^レひ^レ初^レり^レぬ
 ぐ^レ今年^レ治^レ安^レ元^レ七^レ月^レ廿^レ四^レ日^レ享^レ年^レ六^レ十^レ八^レ外^レの^レ朝^レ臣^レ卒^レら^レる^レ其^レの^レ為^レ人^レ尋^レた^レら^レぬ
 勇^レ敢^レむ^レ秀^レ妙^レあり^レ智^レ謀^レ無^レ双^レの^レ大^レ物^レあり^レと^レよ^レる^レ死^レ朝^レ廷^レの^レ守^レら^レり^レ不^レ重^レ病^レ忍^レ地
 心^レ神^レと^レ犯^レし^レ眞^レ土^レ黃^レ泉^レへ^レ送^レさ^レる^レ日^レ未^レの^レ命^レ不^レ換^レら^レんと^レ推^レ言^レら^レり^レ忠^レ臣^レ兼^レ士^レ也^レ死^レ出^レの

やまが 先と逐ひ後と獲ると行へざるは。哀情の涙のこ。冷方ハたうまけを。
 かくて多田満慶が。廟所不並へて是を葬す。孝義化若と行ひる。四天王の人とい
 猶君と追慕のあまう。三月の向廟参りて。日毎おぼくは糸緒ありて。お恩遇
 不報いらうが。満参の日ふ及び酒田公時ハ細と作ぬ。三個の人ふうち對ひ居る在世
 のその程ハ他より。懇不交らひひて。その好玄捨が。く存ざるあり。下下い
 此処より服まを。若今生の契。聖絶む。まこそ又参りて。めとて。是と早め。初と
 つけの液を。始めと奉て。運ハ酒田刀根。何と。う。君万歳の後。と。の。ね。多の
 公達の坐まを。捨て何地。ハ。と。南と。呼之せ。と。公時ハ。回答。せ。ん。それ。追
 注。よ。と。人。と。走。らせ。自。身。由。逐。り。た。け。ま。と。宛。然。風。の。突。き。や。く。性。方。の。ま。ま。は。り
 とらん

多田満仲の五男

頼信 河内守

頼義 小名千寿丸

頼清 井上肥後守

頼朝 掃部少三郎

頼任 河内冠者

義政 常盤五郎

國井祖

源 頼 信

人皇七十七代 後冷泉院 永承三年卒
今嘉永六丑迄八百六年成

源頼信者 清和源氏之嫡流也 撃平

忠常于下總國時素知浅深先驅涉海

諸卒従焉忠常大驚懼乃降

頼信ハ滿仲の末子なり。頼光の命あり。そのまの。年。の。い。ま。若。く。と。り。て。我
 先子のや。必。ひ。育。と。あ。元。末。頼。信。智。勇。不。秀。あ。ひ。ま。子。に。頼。義。あ。り。其。の
 孫。不。義。家。あり。あ。く。武。門。の。棟。梁。と。作。ら。る。良。ね。あ。ま。頼。信。流。と。い。ふ
 い。ど。も。竟。不。清。和。の。嫡。流。と。ま。り。実。ハ。頼。光。の。子。頼。國。と。り。て。嫡。流。と。い。ふ。ま。

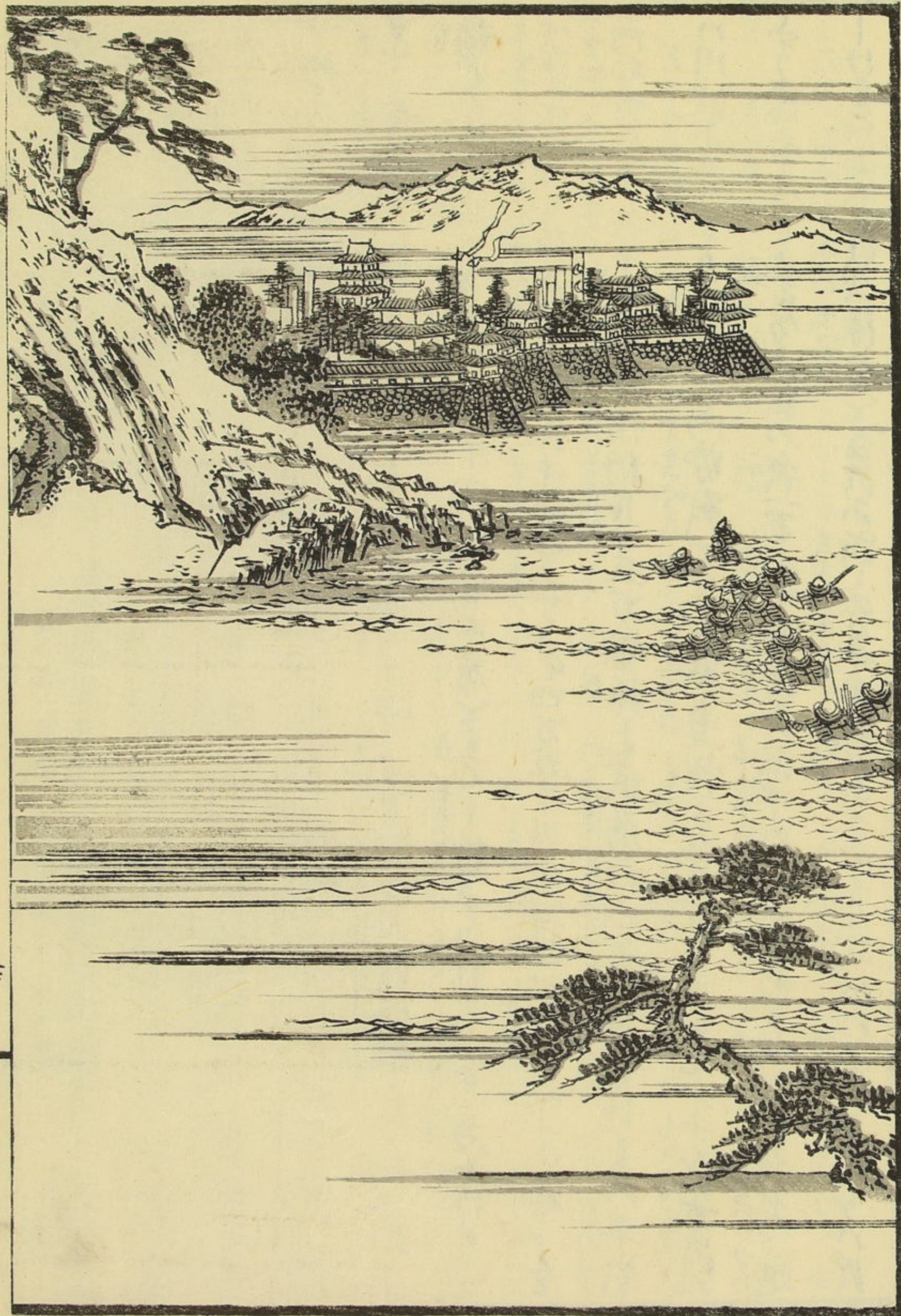


秋津の
六郎
鹿と
射て
兩國の
動乱を
醸す



心若く思ひ一時忠常不説言と構へ正度今の縁者ともうて好身と通ずるや
 あまどまぬる頃和父君と維禰との遠恨と今不使と聞て窺ひ勢を奪ふ
 家と感入るとする結構とさういふと巧みとけしむ忠常更不慮慮あり
 忽地怒りてその義あり是より彼知と責着ん先なる者いふと心へ後者人
 不制せらる。如此ありくと改改てまう合戦の準備とさうあり早くも國司あり
 包昌朝臣へ交えけしむ開の怪々ぬ奉初也と丁九郎照國との不忠を使とて今回
 一家の不和も固く合戦の企ある案以外の外奇怪あり早に和睦と計らひまよ
 がさし仔細ありの事書て以て勅裁と作るとをあると事私不干戈と動う。國
 民と怒さんやと道理とて述ける忠常受て隠すとまよと。とや此奉國司へ
 使て件の使者不頼も人の此方か後方ありまづ一番不國司と進落しとの
 押領の勢不案と東八箇とまよいとはと大膽不敵の心と起しとかの使者

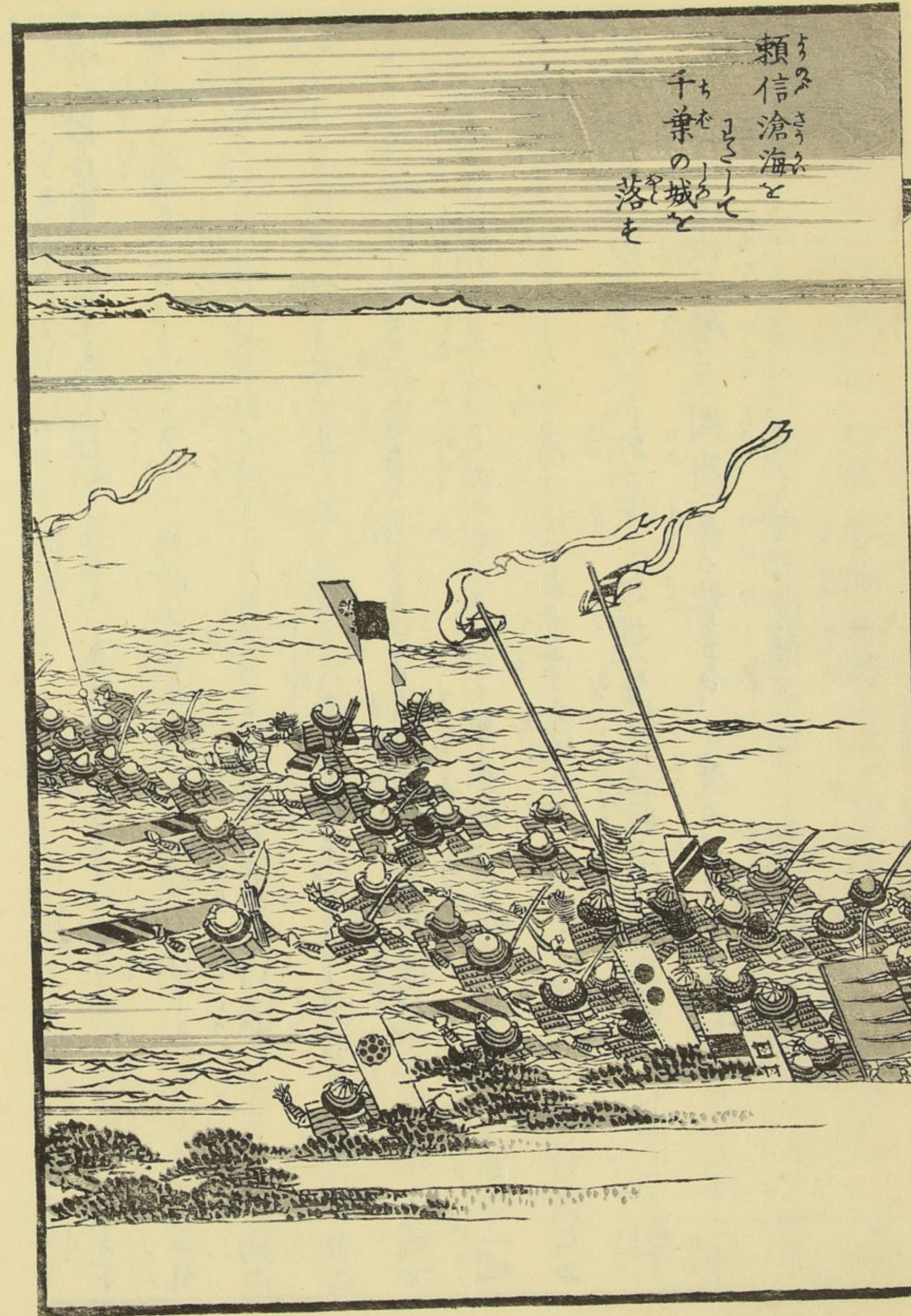
と。餐應ありと欺とを兵仗おれた殺し。雜人們の逆帰里とありと云け
 まは包昌朝臣の孩とあり依の逆心相遠る。右せ左せよとまめくの緯不案
 出で合戦せん忠常の執事あり。予固入るを頼不拒とかる上六哲くも。橋縁とあり
 雜し今宵暮るともち者て國司の謀と落とせしと暴るまよと縁とあり。合戦の
 準備あり不固とてその日酒の刻の比及あり大か不整ひたり。然らば速くうちとて長
 元元年五月下旬若忠の志ぬ宵暗も勢五百八十人着飾の城不押きて
 と吐とを揚りたり。國司の敏も忠常が及心とて初とあり。いまは防禦の備あり
 暴不令と傳えしと固め令と限も不防とまよと元未城中无勢も念あり二三の城
 とを破らして父とて入らしてけしむ今の防くへと城とてりま先とと落失る。國司包
 昌朝臣と枕不討死せんともりたりと家隸あり不田庄司とあり孫也とて抜出後のふよう
 相馬の津とてその夜の申不答とらまよと忠常の志ぬ不國司と雜るく逐逐と勿地



千代田

○廿

千代田



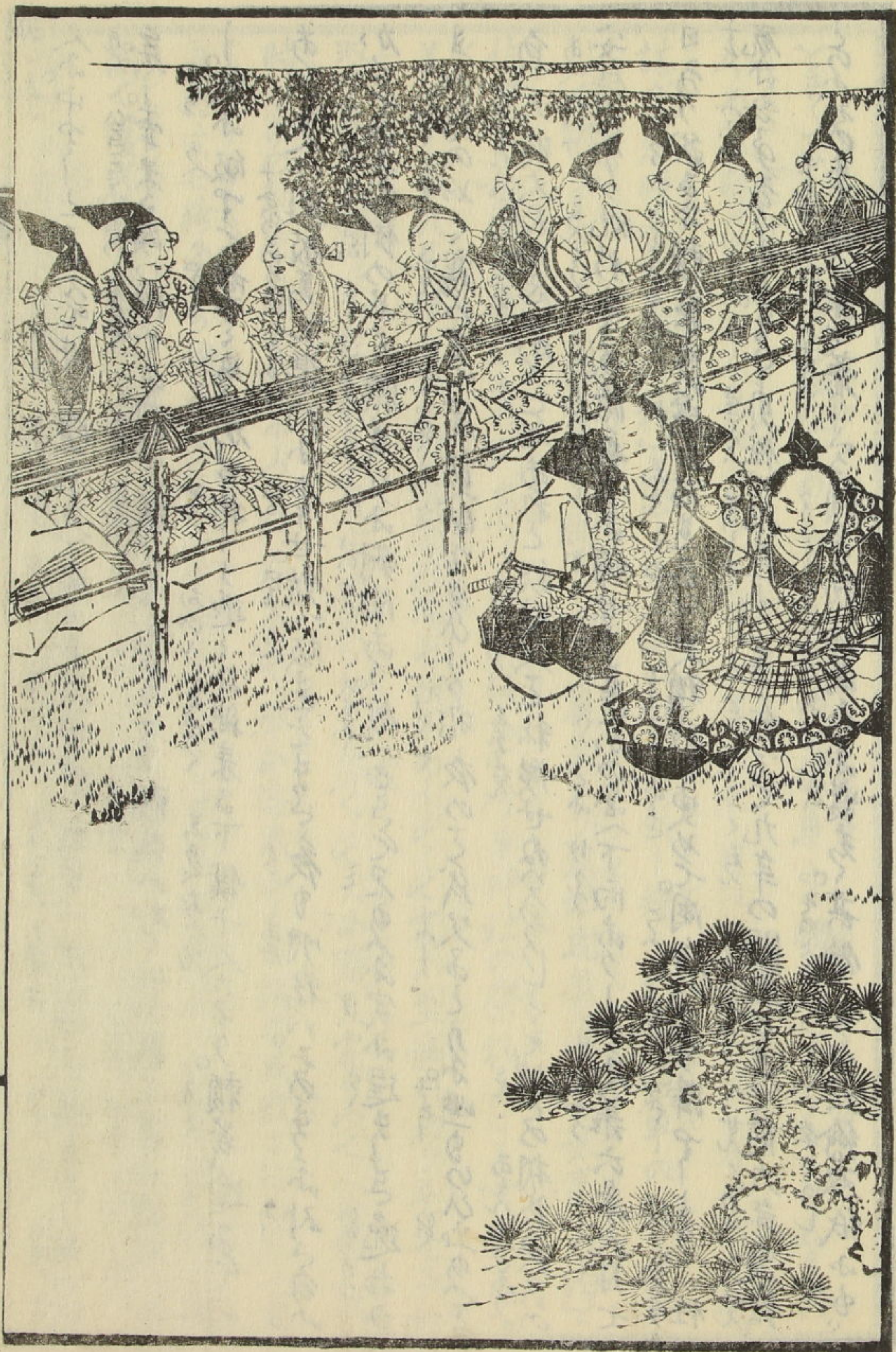
頼信 滄海と
千代田の城と
落も

千代田

千代田

廿のちうとちうのあつたい 今んち くらち まの くらちわう さいや
 杉島の才頼信朝の玄ぬる安治四年河内之楊上。香良峰不在海あり。治安三
 年八月の保守府の軍不補任せしは任充て後甲斐守不補甘きと任不あり
 然も保守頼信と忠常追討の輪青と賜て。急ぎ彼処に罷下り父初治不
 と傳え父子緒共下総不向一不日不殊成とさう。仰合らまけまは頼守長之領
 兼。會守若引保一甲斐不下。輪青と父不違よささるまは。頼信恭をかい戴
 頼てその准候とり。長元三年十月十八日。甲府とて下総へち城あり忠考をよりと
 安才忠頼と為子中村太郎忠將とわくと。四万五千勝勢と授け。防ぐべと命たり
 兩物件の軍兵と率て頼信初治が五万餘勝と。武勇松ふよと出會けまは平家
 河内城不陣とり。明まは兩勢戦と交え勝負推るりけまは。竟不千餘方勝れ
 たり。忠常安て安房上総の兵一万二千勝勢不城中の勢一万勝と相副く援兵と遣
 けまは。兩物件隊分とる兵不所との集り勢あるふより。或ひは下知不使づらば

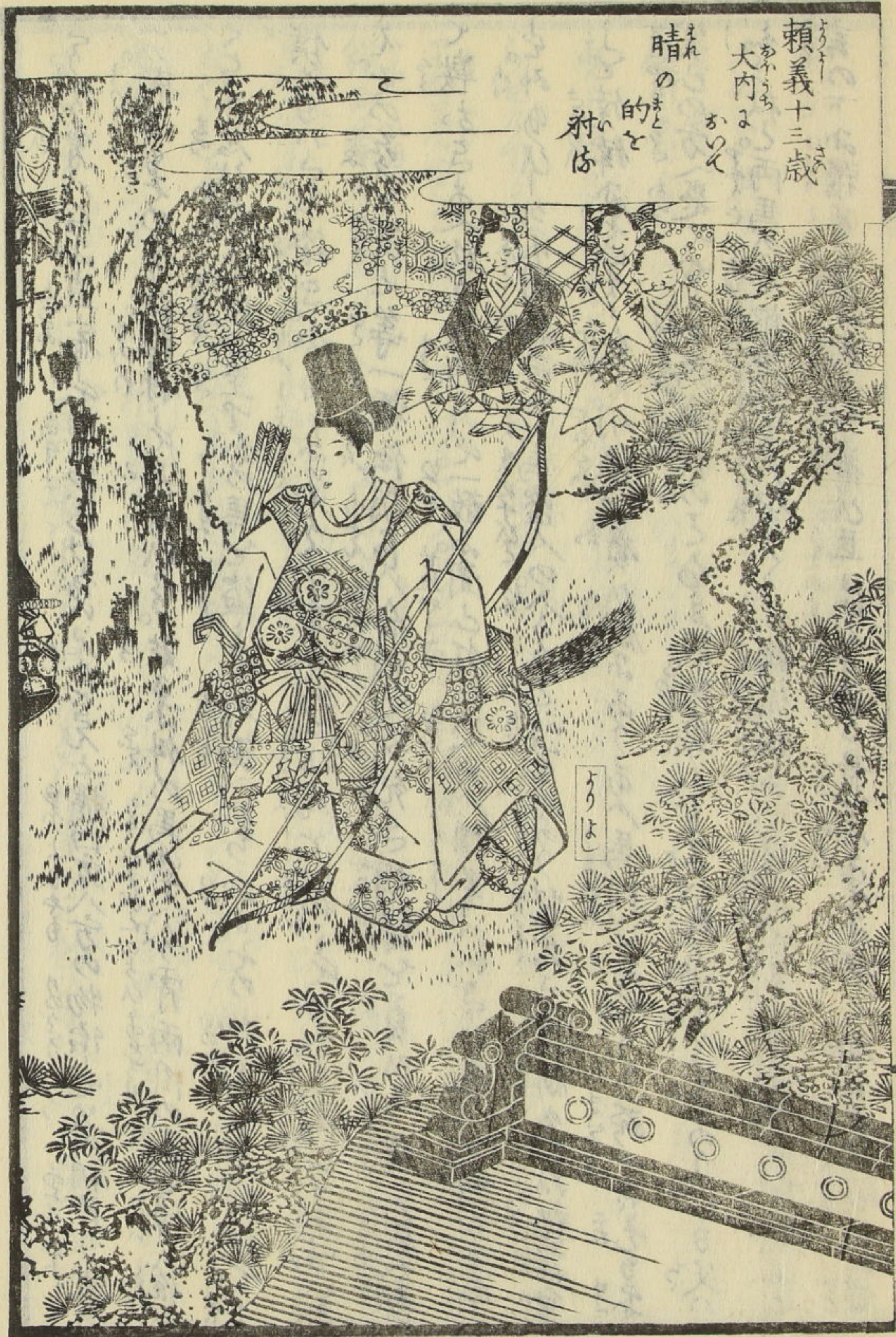
はと先隊分と改め。右左まると不一致せは。あふ於て岩槻中野兩所の戦ひ日利
 めて。陸奥推命忠頼の死不討死と做ふら。太郎忠將の岩槻不在。陣と圍め
 てあつらう。忠常からうと安て。四万餘勝の軍兵と率。岩槻不出張。一夜の間に後
 城と構えらまは。故と防ごらふ。頼信初治は不備ふる。忠考と討せら。いん。敗
 北不及ぶふら。遠く下總へ引かへ。本城千葉不備せら。頼守不防戦の候とる。は
 小長元四年四月二日。宿軍總て五万勝勢千葉城へ押参らふ。この城に忠常が軍
 利ありまは。頼信初治は不構えとて。後あつたと安て。前の滄海漫とて。舟あり
 渡りまは。忠常縁と浦と不令。渡船一艘とあつたまは。三十里がその内あり。船あり
 あつらう。まは。保軍と不隊と。後不ふとて。更不鈴方と知らる。所不あり
 今日の大波不て。浪と浦の勢と。や船ありとも。極くの浪が。かて。ええふら。然も
 惣大頼信初治の海と。さうと。あつたまは。浪勢とる。浪又とて。海の勢と。安て。い



五十二卷一ノ古巻ノ内

〇五

群玉堂藏板



頼義十三歳
大内よ
晴の
的と
射は

よりよ

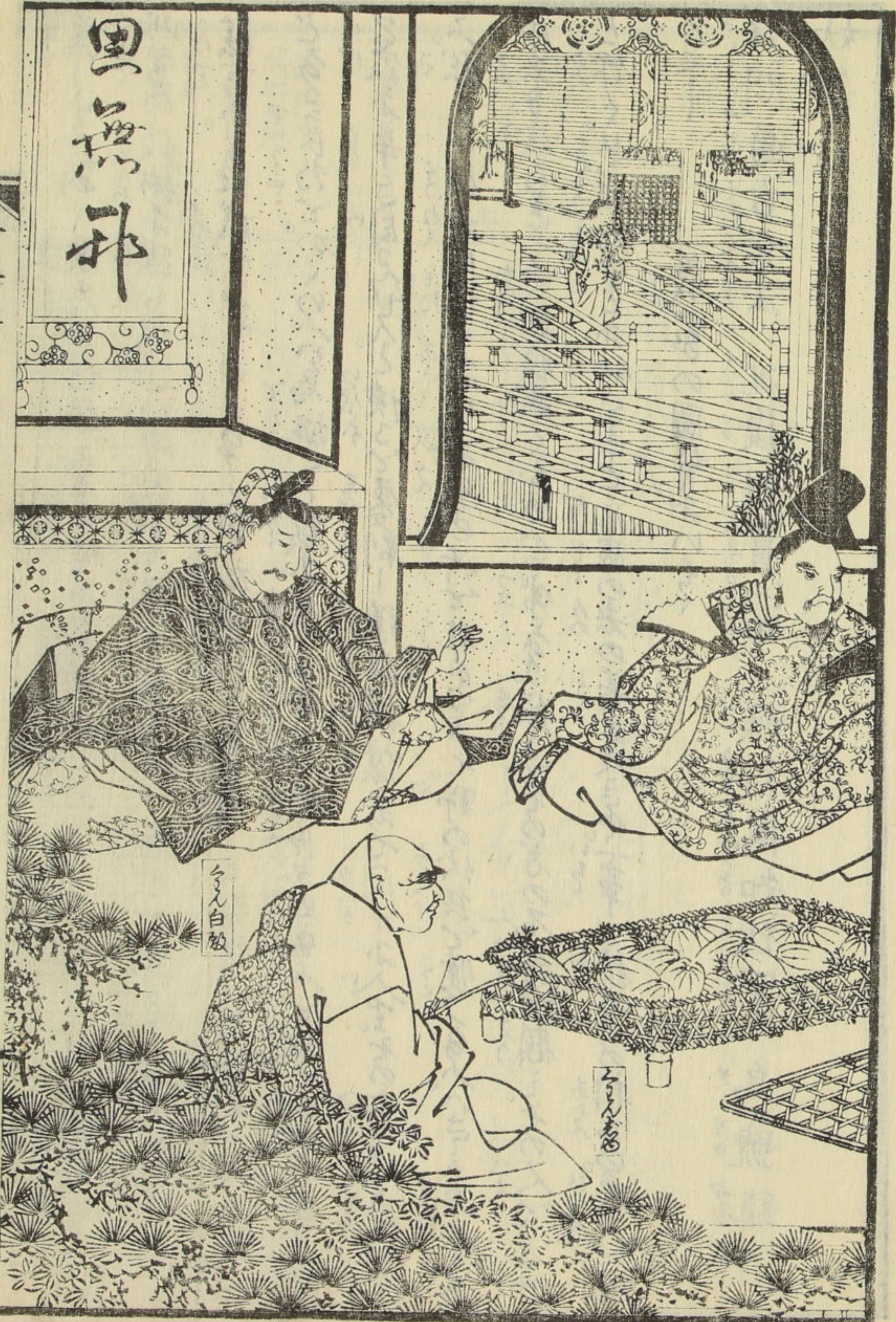
百
臣
傳
一
ノ
古
巻
ノ
内

君
玉
堂
藏
板

源義家の結

前文の如く頼義朝臣は陸奥不在九年の闘戦中鳥海を合戦
 小武勇と入り八幡殿とよみの六戦にござる小賊軍崩し撃つる小衆潰ゆとて
 その勇敵推しては孤家以下。後まことの朝廷に謀る所の任するに清原真人が衛
 武衛元一門真衝が橋本と憎む私に挑み合はるけほど家傳頼義我志は法に
 竟る朝敵の汚名と被り。金沢の柵に官軍を討ちけ。政統元年三年小政が兵と世小
 義家朝臣が奥の三年の戦ひといふ。よのたは法士と勵まるとは法脈の世を定ぬ
 其日の勇怯小成して成ひに別小著さ。臆小著く。是まは良將の新業小。古今未だ
 の巧まあり是等も脱小法書小載し。わづらば更小い。はたてこの朝臣が功績
 小成小は教る所のあり。古戦軍記と傳ふる人も。才小なる名と稱し。是も
 忍の降人宗任が死罪を宥めて近臣と。忍小歩の供も。連を背とむけて胡録小。心

夫を挿せ。別殺の舉ひ。或ひは胃三頃と透下。或ひは鳴法をて。物怪と退け。あひこ
 とい口碑小傳えて。臺より多りぬ。一時所堂の扇白殿。齋をて。鈴らせ。身小。八幡殿を
 あり。この解脫の僧正親修。まに隆陽小名。安倍の晴明日。あり。あひこ。お
 信。く。る。る。そ。願。名。を。ま。に。五。師。老。忠。明。も。多。り。る。を。あ。く。當。内。の。佛。小。冠。を。去
 の。聚。ま。る。る。折。下。一。五。月。一。日。あ。南。都。より。早。瓜。と。献。走。也。齋。の。中。あ。ま。は。取。入
 る。人。と。也。何。あ。ん。僥。倖。晴。明。も。あ。ま。は。占。ひ。下。と。あ。り。け。る。不。信。明。り。あ。之。成。考
 へ。二。顆。の。丸。以。て。出。し。是。あ。い。毒。の。ゆ。に。加。持。せ。ま。は。死。り。下。と。言。を。あ。り。て。親。修
 不。裸。を。親。修。曾。く。護。持。ま。る。ふ。その。ふ。忽。地。動。き。出。し。て。庭。中。と。持。び。怪。さ。ふ。こと。治
 す。ま。と。作。あ。る。忠。明。懷。より。誠。と。把。出。と。ま。を。刺。を。不。動。止。て。元。の。ゆ。に。去。来。と。ま。と
 と。刺。て。ま。と。と。作。あ。り。て。義。家。朝。臣。腰。刀。と。ぬ。さ。下。と。刺。ま。は。丸。の。裡。小。陀。あり。忠。明。が
 刺。を。誠。の。眼。と。母。と。ぬ。義。家。の。手。外。と。日。あ。切。ひ。う。と。か。の。陀。の。首。と。も。勝。小。ち



回無邪

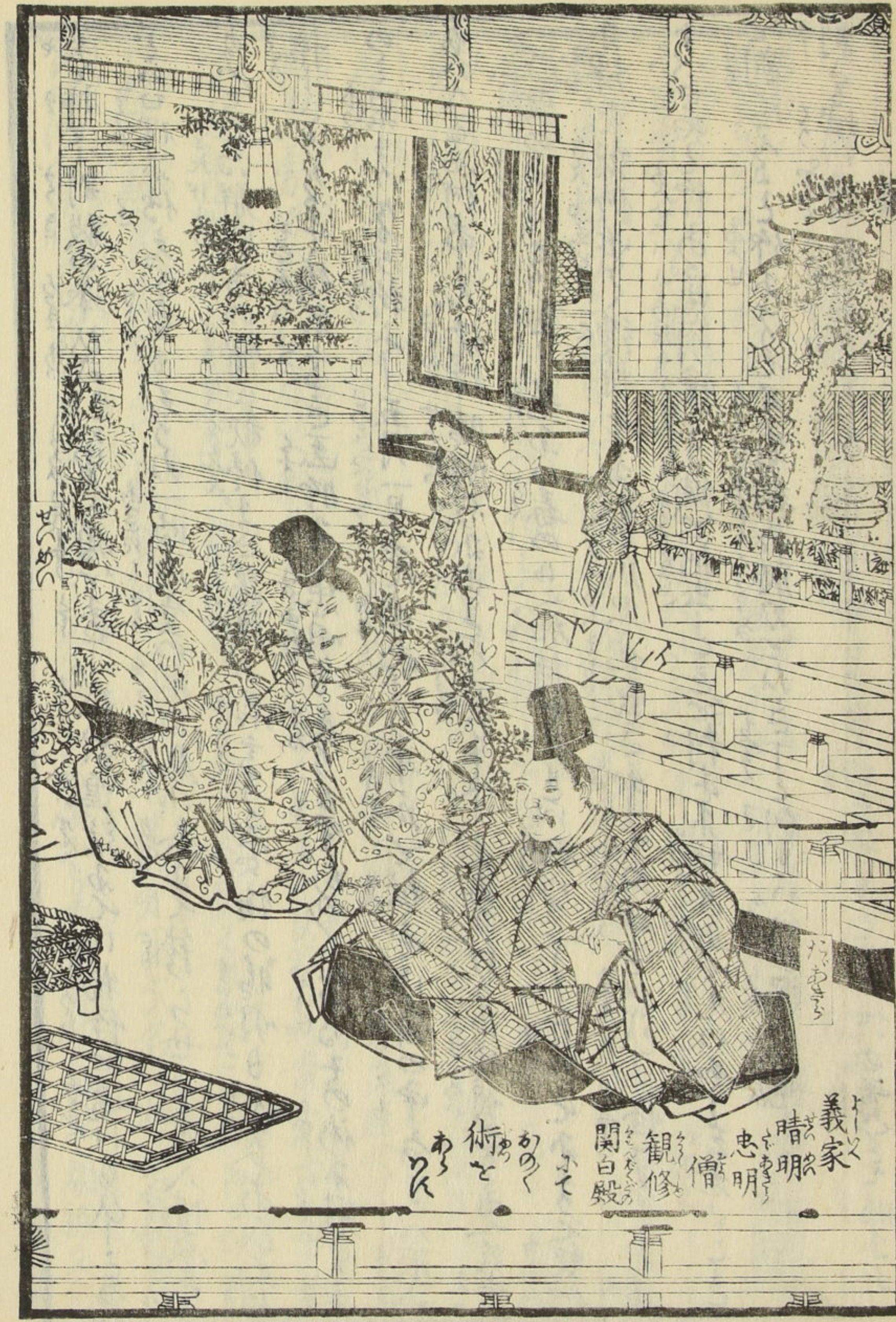
百景集

九

洋王上

白飯

白飯



百景集

君玉堂藏

義家 暗明 忠明 僧 觀修 関白殿 術と あり

落し。其る不怯。能あるの實。不鬼神。日及び。と。是種人。毎不私。契せ。但
 此等の伎術。不限り。功のあ。き。とも。誇る。さ。あ。才。と。謙。す。て。その。量。度。一。か。の。匡。房。が
 陰言。ふ。た。武。士。あ。て。あ。り。あ。ず。軍。旅。の。い。と。愚。あ。り。と。い。ひ。あ。り。と。宗。任。使。て。も。ま。か
 と。ある。良。作。ど。か。い。の。鳥。濟。と。腹。不。居。う。子。家。相。局。が。出。あ。り。と。俟。て。如。世。と。あり。彼。は
 の家。が。辛。く。目。ん。せ。ん。と。懐。く。と。屢。判。一。謙。退。構。懐。あ。て。門。下。小。入。り。その。安。法。と。學。び。玉
 不。然。ま。は。後。年。の。没。不。愛。望。飛。雁。の。行。せ。れ。と。野。の。伏。兵。と。腹。り。あ。り。い。さ。う。卓。量。あ
 信。者。も。誠。ら。ま。そ。自。然。腹。垂。く。あ。り。の。常。あり。然。る。と。その。身。の。不。屑。と。顧。み。その。人。と。人。所
 と。作。く。是。後。初。の。と。小。似。ま。と。凡。慮。の。者。の。若。ま。と。一。事。と。推。て。る。初。局。の。為。人。と。私
 義。家。の。圖。賛。か。い。ま。く
 雁。行。亂。知。伏。軍。 烏。號。鎮。消
 好。問。通。古。兵。法。 况。復。射。貫。三。甲
 妖。氣

吉柯	左大夫	從五位上	伊豆守
近澄	右大夫	從五位上	周防守
賴佐	從五位下	能登權守	
賴貞	太郎		
光賴真人	出羽仙北		
武則真人	鎮守府將軍		
賴遠	太皇太后		

清原武則

人皇七代後冷泉院康平六年二月為鎮守將
將軍令嘉永六丑追七百九十二年三歲

清原武則者引兵自出羽國來援源

賴義勳力以破貞任宗任矣賴義

賞之

按。不。賴。義。將。軍。貞。任。一。家。と。滅。さん。う。て。軍。旅。屢。あ。り。け。ま。と。武。ひ。の。大
 故。の。為。不。困。め。ま。武。ひ。の。肌。體。と。糧。食。之。を。七。勢。不。討。あ。り。ま。と。國。府
 不。降。や。不。ら。く。棄。供。の。ひ。の。光。賴。武。則。不。援。兵。と。後。多。然。る。小。光。賴。思。慮
 交。せ。武。則。從。教。と。傳。七。是。と。援。け。夷。城。と。擊。家。名。と。貞。任。征。伐。の。功。半。武。則。不。あり

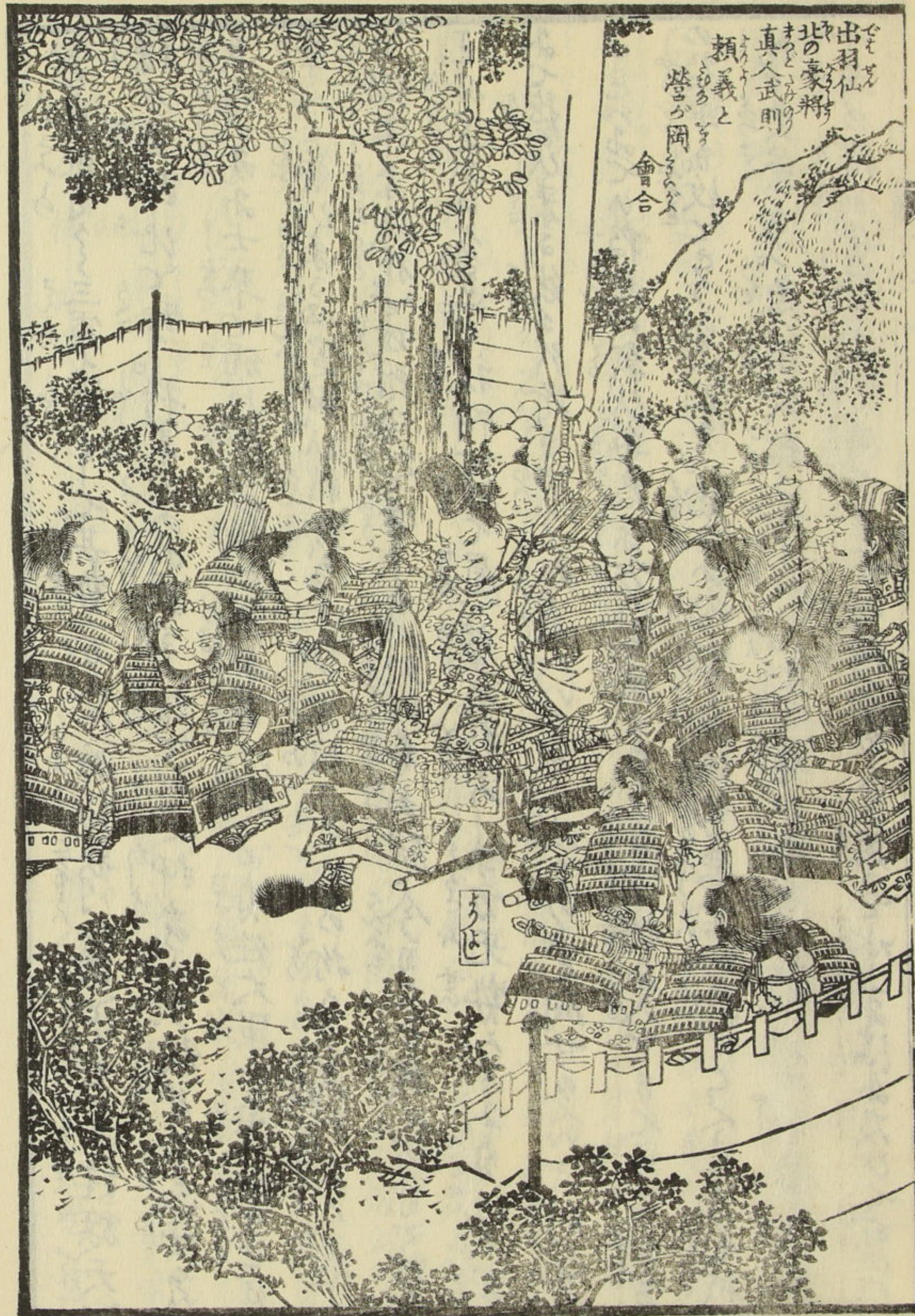
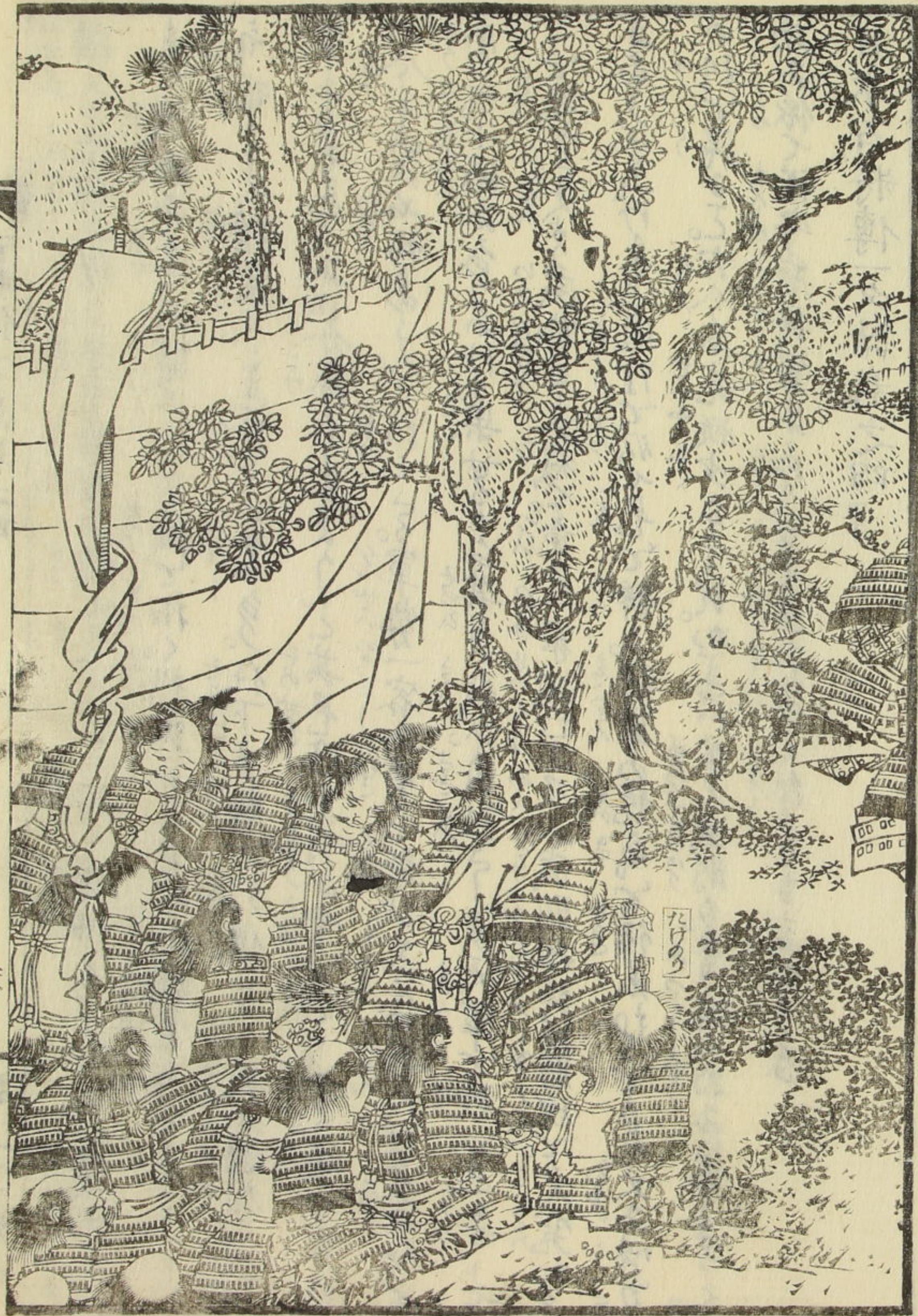
百將傳一列言卷之四

群玉堂藏板

清原武則の節

武則の出自あつひるがや。出羽を仙北の豪將あり。然るも將軍頼朝が權假ふ因
て兄光朝の交せざるも一人抽出て領掌。後男荒川太郎清原武貞の甥逆
志方大平掃部頼朝の妹のふみで舞あり。吉原秀武貞頼朝が才新方次郎
頼朝二男源四郎右兵衛武忠四男貞隆三郎清原武道等と指とあてその
勢於合一万餘將將軍と牒ト合せ田村將軍の右例不任せ管圍あて將軍
と合合以干時康平五年八月九日あり。是より陳の分隊と定め。責任が叔父の
僧良昭が發せし。小松の柵の破れと指せし。兵と發せし。毎小利運あり。美策
國あつひとのいさ。北中同年九月六日の合戦の宿軍方糧食脱ふ之けれ。
般井郡仲村の耕作地あり。二千余人と分遣。稲粟等を劫り。めえ普く軍
狗不依人と做し。あつひと風不依と然るも。六管中无勢あり。其虚と待て。是れ

んと貞任自々三軍あつひて其勢一万二千餘將。秋川の柵とち。立旗旗天と
採り馬蹄地と初。將軍方の屯する。小松と外に押参り。頼朝と合して。兵
糧の爲ふ士卒と領け。今も隊の軍兵寡し。然るも貞任大軍と率以共虚。兵
撃んと發ひ来る。必定戦ひ難儀ある。と思惟し。あつひ折る。武則其人進
出依年未賊化と攻難心と勞し。あつひ折る。武則其人進
と必定不ひる。是と祝詞と發て眉を擡め。あつひ味方无勢ある。貞任大軍
ふて統率ひ来る。然るも。斯の言も。真人の言も。あつひある。と問せ。あつひ武則其
は。あつひの殺害の殺し。毎夜味方の容赦とあり。且重地ふ入とり。あつひ將軍
の將軍も。故とさる。あつひなる。然るも。今も貞任將軍要害と捨く。あつひ未だ是れ
は。あつひ失策ある。あつひ水底離る。あつひ千尋の水底不栖。あつひ安と致す。あつひ
千尋の深淵不在。あつひ人得と。是と洗搏不。あつひ水よ不。あつひ及びて。あつひ



出羽仙
北の家將
真人武則
頼義と
營少岡
會合

百歩作
一歩作
言者六尺

群
王
堂
藏
松

漢父が密網不罹る。渠等要害不控て支えらる。輒く退治をかんて深淵に墜
 して浅水不末る。運るて自滅と拒く兆あてかえまぬ。加納雲氣とるんれ。女
 氣晴くく樓のや。とて敗るの象あり。在下子勢と引俱く。一氣不備彼らに
 軍不日をもくみ。分隊あま下り。其是非多明不掌と示さぬ。述さるれ
 ば今もさる。如何あんと詰とる。軍勢一容不勇と歎び。其人の異え理不愛れ。と
 勇氣十倍ある。あける。果せらる。其日の戦ひ。貞任さりの大軍と敗らる。幸とて
 こと退を。とまら。威勢日と減て。竟一家滅亡。及ぶ武則。始後の勝敗と。え究む
 不あ。とる。げま。と道理。とん。是と辨。と。結軍の銳氣と信。とむ。とりて。大味方
 の利と得。と。古。今。不先。蹤。少。る。と。げ。か。ま。ば。其人。武則。日。普通。の。お。め。の。あ。ら。ん。
 功。不。依。て。後。守。府。將。軍。不。あ。り。世。不。清。の。軍。と。結。さ。る。由。直。ら。る。と。る。

日本百將傳一又話卷之四 畢

